

コロナ禍フランスの大学生活断章

～2020年度後半を中心に～

宮城学院女子大学 一般教育部 間瀬 幸江

はじめに

2020年10月下旬から2021年3月まで、筆者は、リヨン第二大学の研究所組織のひとつである Le laboratoire Passages Arts & Littératures (XX-XXI) の客員研究員の立場で、フランス・リヨン市に滞在した。住まいとなったリロンデル寮 Résidence André Lirondelle は、CROUS (Centre régional des œuvres universitaires et scolaire、地方学生・生徒生活センター) がリヨンに管理する寮のひとつで、研究棟と学生棟を同じ敷地内に持っている。

2021年3月中旬に帰国し2021年から大学業務に復帰、その後日本の学生たちから、フランスでは、コロナ禍を学生たちがどのように過ごしていたか知りたいという声を幾度か聞いた。本報告の主旨は、未だワクチンの接種はおろか開発の進捗状況もはっきりしていなかった2020年度後半のフランスの大学生活について、外国人の一客員研究員の視点からささやかな記録を残すことにある¹。

まず、滞在中の筆者が取りえた視座を明らかにするために、筆者の滞在中の日常を時系列で述べる。感染症拡大防止政策下にあって、ほとんどの文化施設ならびに飲食業(レストラン、カフェなど)が閉鎖²されていたばかりか、大学授業のオンライン化、研究会組織の企画延期などが続いた。したがって、筆者が何を体験できたかを記録することは、何が体験できなかったかを暗に記録することにもなろう。続いて、当時のフランスの学生たちの置かれた状況に関する新聞記事等で、オンラインで閲覧可能なものを掘り起こしつつ、同じ時期を同じ国の中で生きた者の実感を経由しつつ外観する³。そして、この頃の大学生の生活について取りまとめられたある動画を紹介し⁴、大学での学びの

¹ 本稿は、科学研究費基盤研究 (C) 『災いの時代における主体的叙述—語り・観察・記憶の当事者性に関する領域横断研究—』(課題番号: 20K00476研究代表者: 間瀬幸江) の研究成果の一部である。また、2021年12月16日開催の宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所多民族グループ第4回公開研究会「コロナ禍のヨーロッパⅡ」での口頭発表「コロナ禍フランスの大学生活～2020年度の新新聞記事から～」を、加筆修正してまとめたものである。

² 2020年10月29日発令デクレ NO.2020-1310に基づく措置。このデクレの前まではいずれの施設も対面にて稼働。

³ 本稿内で特に断り書きのない場合、引用元記事は『ル・モンド』紙である。

⁴ 登録者数120万人の動画チャンネル「ドキュマンテル・ソシエテ」Documentaire Société制作の『コロナ禍：私の学生生活』(Covid: ma vie d'étudiant). 2021/03/17. URL: <https://www.youtube.com/watch?v=7oXGy8Q5WGY&t=44s>

本来は滞在時に出会った人々へのインタビューなどを行いたかったが、人々との物理的な距離を縮めることは制度的にも精神的にも、そして衛生面の配慮から言っても困難であった。生活面でオンラインで人と接することは、2020年度秋の時点では、代替手段にすぎず、それじたいを「人と会うこと」と見なす発想はほぼなかった。だからこそこうした動画制作にのちに繋がる形で、リアルタイムでフランスの学生たちの姿や声を拾う取

大前提となる生活＝命（vie）を支える構造の、フランスでの一端を書き記しておきたい。

この三段階の振り返りを踏まえてから、コロナ禍に起因する不安感や閉塞感に苛まれるフランスと、その圧迫感に向き合う、人々の自律性、相互主体性に思いを馳せる。

コロナ禍での大学寮生活～一外国人研究者の日常～

そもそも、衛生面での問題がなかったとしたら、筆者は大学の同僚の友人宅にホームステイする予定であった。短い研究滞在期間を有効活用するには、研究者仲間とより多く時間を共有するのが有意義だからである。しかし、人との接触こそが感染につながるコロナ禍にあっては、自らが感染源となること、あるいは同居人が陽性になる可能性への気疲れとそれゆえの免疫力の低下が懸念材料であった。寮生活を選んだのはそのためである。

一度目のロックダウンが解除され夏のバカンスシーズンを終えたフランスで、感染者数が再び急こう配で増加していた10月下旬、筆者のフランス滞在は開始された。すでに夜間外出禁止令が敷かれており、共同スペースの使用を禁止する貼り紙があった。ただし、共同スペースの最たるもののひとつランドリーは従来通り稼働していた。衛生面の不安を強く感じつつも、ここが閉鎖されなかったのは助かった。寮の郵便受けには、国から配布された布マスク2枚が届いていた。マスク着用が義務付けられる中、不織布マスクを購入する経済的余裕のない住民は、この布マスクを常時着用していたように思う。

10月30日から始まった第二回のロックダウン下、博物館、劇場、映画館、そしてレストランやカフェといった文化施設は閉鎖された。研究者間の顔の見える対面での交流を望んでいた自分にとって、所属先であるリヨン第二大学でも、授業を含むあらゆる業務で対面が禁じられそのため研究者受け入れ窓口や教職員証発行のサポート事務が滞った。リヨンとサンテチエヌの大学等研究組織所属の外国人研究者をサポートする組織エスパス・ユリス ESPACE ULYS の窓口対応までもが、すべての業務をオンラインに転じたのにはほとんど参った。リヨン第二大学の受け入れ組織の研究者には、パリをはじめほかの都市や地域に生活の拠点を置きリヨンにはもともと単身赴任をしている人々が少なくなかったため、受け入れの世話係になってくれた人々の多くがリヨンを離れてしまったことも泣き面に鉢となった。受け入れ組織の事務が停滞すれば、公立図書館やアーカイブの利用に必要な身分証入手も先延ばしとなる。身分証を手に入れたところで、県立や市立のアーカイブも、国からの特例措置を受けるごく一部の研究者以外には門戸が閉じられていた。

第二回ロックダウンの解除は12月15日であった。ただし11月下旬から、日中に外出可能時間が1時間から3時間に伸ばされるなどの段階的な緩和措置がとられ、この頃からリヨン市内の大学図書館施設は利用可能になった⁵。筆者はしかし滞在期間開始時に事務手続きが滞ったトラウマから、12

り組みに敬意を表したい。取材された時期が、筆者の滞在期間中と概ね重なることも手伝って、コンテンツの情報としての信ぴょう性を感じた。

⁵ どの図書館も、閲覧室の事前オンライン予約の仕組みを整えていた。これにより入館者の集密を避けることができた。この仕組みがコロナ禍以前から整っていたか筆者は情報を持っていないが、2020年度後半、瑕疵のないシステムとして機能していたように思う。なお、リヨンのドゥニ・ディドロ図書館は、図書の貸出と返却に

月15日の解除までは寮にこもり手持ちの資料での研究生活に甘んじた。滞在者どうしの対面の交流企画の禁止措置は、滞在期間中、事実上解除されなかったと記憶している。入寮者間の横のつながりをつくる機会はほぼなかったと言っている。かろうじて、スーパーなどに日用品を買い求めにいく1時間弱の外出時に、寮の管理人と短い挨拶を交わすことだけが、顔の見える人的交流であった。

しかし、12月15日からはクリスマス商戦が始まり、商業施設に買い物客が詰めかけ、コロナ禍であろうとも人々がシーズンを平時同様に楽しもうとしていたことは印象深い。マスク着用が法的に義務付けられたことから——衛生面の懸念が国民全体への同調圧力と連動する日本とは、マスク着用をめぐる感覚が全く異なるのは特筆に値する——町に繰り出した人々は例外なくマスクをしていた。ただし、飲食店では例外なく、対面での飲食の提供を伴う営業が禁止され、テイクアウトのみが認められていたため、フランスらしい活気が町に戻ったとはいいがたいところがあった。

2020年末からは、ワクチン接種が、高齢者ならびに既往症のある人々から順次開始されたが、2021年1月に入ると再び感染者数グラフは高止まりを続け、夜間外出禁止令が再び発令されるなど、予断を許さぬ状況に入る。この高止まりは3月下旬について上昇傾向へと転じ、2021年4月3日には第三回ロックダウンがはじまることとなる。過去二回のロックダウンの経験に学び、措置はより柔軟になり個別のケースへの目配りがなされるようになったものの、ロックダウンということばがフランスの住民にもたらす閉塞感は依然強かったに違いない（筆者はこの頃すでにフランスを離れていた）。イースター休暇の最中でもあり、経済に与える影響も小さくなかっただろう。

以上の通り閉塞感がすべてに勝っていた時期ではあったものの、2020年秋には無料のPCR検査の仕組みがすっかり整っていたことは強調して余りある。筆者は12月24日のクリスマスを友人宅で過ごすために、寮からメトロで2駅のジェルラン・スタジアムに設置された検査会場に赴き、鼻咽頭検査を受けた。パスポートを見せ、連絡先電話番号とメールアドレスを伝えると受けられる。24時間以内に検査結果をメールで送ると言われたが、実際はメール受信までには30時間以上を要したため、友人宅に陽性者ではないお墨付きを得て滞在する安心感を手にすることはできなかったが、2021年春の時点でもなおPCR検査を受けたくても受けられない罹患者があちこちにいた日本の当時のコロナ対応は、フランスに大きく水をあけられていた。また、PCR検査の会場に詰めていた、重装備の若い医師たちとのちょっとしたユーモラスな言葉の掛け合い（「皆さんの重装備を見ると、わたしは異星人になった気持ちです」「いやいや異星人は我々のほうです、宇宙飛行士みたいな格好ですから」）がありがたい国際交流のひとつだったこともありありと思ひ出す。

新聞記事から見える、フランスのコロナ禍学生生活断章

一外国人研究者のコロナ禍の生活の一端を素描してみても、孤立感に押し流さずに日々を送ることがすでに大きな挑戦であったと気づかされる。翻って、限られた年限で学業を修めねばならない学生の

ともなう物理的接触を徹底的に避ける目的から、図書の貸出も事前予約としていた。図書はあらかじめ、係員が紙袋に入れて別室に準備する。また、返却用にも別室が設けられていた。利用者は、返却日ごとに簡便に仕切られたスペースに、本をボンと置いて帰る。学生や研究者のみ使用できる図書館であり盗難の懸念が少ないことなどから導入できた仕組みだろうか。

不安と恐怖を慮る。以下、フランスの学生生活にかかる経費についてのコロナ禍前の基本情報を把握したのち、新聞記事等から読み取れた、コロナ禍以降の学生たちの困窮状況や国の施策等を眺めてみる。

そもそもフランスと日本とでは、学生生活の収支や必要経費の内訳のあり方が大きく異なる。2016年の数字によれば⁶、学生生活の必要経費を100%とした場合、アルバイト等から33%が、奨学金等の公的援助から31%、家族からの援助が25%となっている。また、生活費（食費、住居費、旅費など）補填のために有償で働かざるを得ないとする学生は、全体の30%であった。有償労働者率は46%で、それを母数としてうち54%が、その労働をしないと生活が出来ないと述べ、25%が、その労働により学業が妨げられていると述べている。なお、2021年9月時点の調査によると⁷学生の家賃平均額は550.92ユーロで、これは生活費の約三分の二を占めるという。ただ、フランスの高等教育の本人負担額は日本に比して安価ではある。2021年の段階では学士課程が年間170ユーロ、修士課程は243ユーロ、そして博士課程が380ユーロである⁸。もっともEU外の学生の学費は、学士課程2770ユーロ、修士課程は3770ユーロに跳ね上がる。本稿では踏み込めないが、EU外の学生でフランスにとどまる学生への支援がどのようになされていたのか、出身国の通貨価値や各留学生の財政事情によっても状況は異なるだろう。いずれにせよ、家族からの援助割合が25%にとどまることや、アルバイトをしなければ学生生活を営めないとする学生が2016年の時点ですでに5割を超えていたことは念頭に置いておきたい。学費がたとえ日本に比して安くても、学生生活にかかる費用を何らかの手段で自ら捻出する学生が半数近くいたのである。

では、コロナ禍により、フランスの学生生活がいかなる影響を受けていたか、2021年12月時点でネット検索のできた新聞等記事をつなぎ合わせつつ振り返ってみる。

コロナ禍による国の施策が開始された2020年3月から、フランスは高等教育機関における教育の継続をうたい、そのため3月16日から事実上開始された第一回ロックダウン後も、授業はオンラインで継続されることとなった。これを受けてまず、留学生たちが帰国と残留の選択を迫られた。フランスに家族のいない彼らは、残留すれば孤立を余儀なくされるが、帰国しようにも旅費捻出の問題に直面させられた。3月21日には、例年5月に実施される第二セメスターの学期末試験のオンライン実施が決定され、このためのインフラ整備ならびに不正行為防止の観点から現場の混乱が始まっている。3月24日には大学選抜試験が5月に延期された。4月18日に実施が予定されていたシアンスポ（パリ政治学院）の入学試験は中止となった。国として、全体にオンライン授業に舵を切ることが春に決定されたことを受け、例年夏前に実施される選抜試験や期末試験の準備には手が回らないとの判断がなされたものとみえる。4月3日には、6月17日に実施予定であったバカロレアも中止が決まり、進路

⁶ «Enquête Nationale conditions de vie des étudiant.e.s. 2016», OVE (Observatoire National de la vie Étudiante). URL: www.ove-national.education.fr/wp-content/uploads/2018/11/Fiche_Ressources_economiques_des_etudiants_CdV_2016.pdf (最終閲覧日: 20211130)

⁷ Vie publique, «Eclairage. Étudiants: quelles conditions de vie?» (最終閲覧日: 20211130)

⁸ Campus France «Le coût d'études supérieures en France», URL: [Francehttps://www.campusfrance.org/fr/cout-etudes-superieures-france-frais-inscription](https://www.campusfrance.org/fr/cout-etudes-superieures-france-frais-inscription) (最終閲覧日: 20211130)

の選抜は、高校の内申点によるという異例の措置が取られた。

教育の継続と試験や入試の中止などを受け現場が急ごしらえで対応を迫られていたこの頃、学生中の一定数を占めるアフリカ系留学生たちが困窮に直面していた。4月11日付の『ル・モンド』は、許可証なしの外出禁止取り締まりが日常的に行われるなか、食事の回数を一日に一度、体力的に可能であれば二日に一度に絞り込むなどの節約を余儀なくされる留学生について報じている⁹。

4月13日、ロックダウンの段階的解除が大統領演説により宣言されたものの、EU以外の国々との間の国境閉鎖は継続されるなど、予断を許さぬ状況が続く。筆者が検索した限り、『ル・モンド』紙がコロナ禍の学生たちの精神的孤立や生活支援の必要性などを、ある程度包括的な視座に立って報じたのは5月26日のことである¹⁰。この頃からマスメディアは、学校組織がこうじる施策をめぐる議論から、コロナ禍を生きる個別の問題の可視化へと、報道の幅を広げていっている。6月13日には『リベラシオン』紙が、職業高校から社会に出るための最終段階にある生徒たちの不安（面接やインターンシップの延期が相次ぎ、就職活動の先行きが不透明になっていることなど）を報じている¹¹。

2020年夏、ノーマスクでの夏のバカンスシーズンを終え¹²、新年度を迎えた9月、対面・遠隔・ハイブリッドなど授業の実施形態の多様化に伴い、教育機会の不均衡が社会問題として顕在化してくる。9月15日、やはり『リベラシオン』が、学生たちの「コロナ禍で私たちは損をしている」¹³との声を報じている。しかしながら、9月29日にはスポーツ青少年社会教育市民活動省が、バカンス明けの学生たちの会合が新たなクラスターを多数生んでいるとの見解を述べたり¹⁴、その1週間後の10月5日には、大学の教室を含む空間の収容人数定員を50%に制限する旨政府発表がなされたりなど、対面での学生生活再開への懸念材料も世論を賑わせた。時を前後して10月11日、学生の精神的不安定・孤立はこの秋に取り組むべき重要な課題になると精神科医が警鐘を鳴らす¹⁵。

2020年春に打ち出された国や大学のコロナ禍での大原則「教育の継続」に基づいて動いた教育現場であったが、同年秋には、経済面・精神面でのサポートが極めて重要な問題として浮上したことが分かる。10月14日「授業は始まったけれども落ち込むことが多い。ひどい授業もある。機械の扱い

⁹ «Ambroise Nomo, 25 ans, est obligé de limiter ses repas. “Un seul par jour ou, au pire, deux si je sens trop mon estomac”», *Le Monde*, le 11 avril 2020.

¹⁰ «Isolement, précarité, perte de repères : comment le confinement a fait basculer psychologiquement certains Étudiants», *Le Monde*, le 26 mai 2020.

¹¹ «Des universités déjà connectées aux clusters», *Libération*, le 15 septembre 2020.

¹² この夏に個人営業書店業界がバカンスシーズンに照準を合わせた販売促進キャンペーン「太陽、海、緑、私の本屋」(le soleil, la mer, mon libraire, de l'air, la mer, ma libraire, de l'air, du vert, mon libraire)については拙稿「『本』は心の食べ物であり、生活必需品である～コロナ禍が可視化したフランスの読書文化の自律性～」『キリスト教文化研究所研究年報：民族と宗教』55号（宮城学院女子大学キリスト教文化研究所、2022年）で触れた。キャンペーンポスターには、明るい海辺で本を読む人のイメージが用いられている。

¹³ «Étudiants : avec le Covid, «on se sent volés»», *Libération*, le 15 septembre 2020.

¹⁴ «Interview de Mme Sarah El Haïry, chargée de la jeunesse et de l'engagement, à Sud Radio le 29 septembre 2020, sur les lieux de transmission du Covid-19 chez les jeunes (fêtes étudiantes, bars, universités...), le communautarisme et l'appel au lancement d'une convention citoyenne pour la jeunesse», *Vie publique*, le 29 septembre 2020.

¹⁵ «Frédéric Atger, psychiatre : «L'isolement social des jeunesadultes est un danger majeur de cet automne»», *Le Monde*, le 11 octobre 2020.

かたをまったくわかっていない教員も少なくない。大学からはおびただしい量のメールが届き、とても全部は追いかけることができない¹⁶、11月10日「若者の孤立感が高まっている」「話を聴く枠組み作りが必要」「孤立するのは自分のせいなのだ、と思い込んでしまう学生が増えてきた」¹⁷、11月16日「私たち若い世代が、高齢の人たちと同じように動かないでいられるなどと思わないでほしい」¹⁸。メディアがこのように懸念材料を複数の視座から継続的に議論する積み重ねを経て、11月20日、フランス医学アカデミーが声明を発表、コロナ禍の精神面の影響への対応が急務であるとした¹⁹。

かくして第二回ロックダウンのさなかには、コロナ禍での「教育の継続」の、技術面のみならず質の議論が深まったり、取りこぼされてきた声を救いあげ、連帯して声を上げる動きが報道されたりするようになった。11月24日には『リベラシオン』が、エコール・ド・コムルスの対面授業ゼロの方針を不服として、学生たちから、学費の一部返還を求める嘆願書が提出されたと報じている²⁰。また、ロックダウンの段階的解除（小売店11月28日～、映画館・劇場は陽性者数が一日5000人以下収まることを条件に12月15日から——ただしこの数値目標は達成されず、1月20日に日延べされたものの、この1月20日の解除もまた見送られた——、そして大学は1月20日から）を不服として、11月27日、各地大学が反発を強め、学長連合が1月初頭からの大学での対面授業再開を求める声明を出したとの報道もあった²¹。こうした動きが功を奏し、12月20日の首相発表にて、大学の対面授業実施は1月4日からとする通達が出されることが決定した。

国が学生たちの声を聴く姿勢についてのメディア戦略として、2021年1月21日にエソンスで実施された、マクロン大統領と学生との公開対話は特筆に値する出来事であった。同日、マクロンは、学生食堂で一日2食を学生には1ユーロで提供することに加え、週に一度は、大学敷地内で指導を受ける権利を保障する旨発表している。学生の心と身体 の両方に、最低限必要な養分を補給する仕組みが、国レベルである程度均質的に整えられたと言えるだろう。ロックダウンの段階的解除が文字の上では進められてはいたものの、12月15日以降に始まった夜間外出禁止令（この日まではロックダウンで日中の外出可能時間の上限が3時間に限られていたことから、この外出禁止令はむしろ緩和措置にあたるが、大学や飲食業の完全再開はまだ先のことであった）に伴う閉塞感は継続していた。こうした中であっても、学生の声が聴かれることなく孤独の中にうずもれてしまう状況を脱し、国に直接声を届ける仕組みに向けた段階的改善が起っていたと言える。

¹⁶ «Les cours viennent de commencer et j'ai déjà l'impression de couler»: les étudiants au défi du découragement», *Le Monde*, le 14 octobre 2020.

¹⁷ «Ce reconfinement, c'est la double peine. On est enfermés et en plus, c'est de notre faute»: une jeunesse en détresse psychologique», *Le Monde*, le 10 novembre 2020.

¹⁸ «On a la même vie que des personnes âgées»: quand la solitude menace les étudiants», *Le Monde*, le 16 novembre 2020.

¹⁹ «Impact de la Covid 19 sur la santé psychique», Communiqué de l'Académie nationale de médecine, le 20 novembre 2020.

²⁰ «Frais de scolarité en école de commerce: «10 000 euros pour des cours en ligne, ça fait beaucoup»», *Libération*, le 24 novembre 2020.

²¹ «Le déconfinement tardif suscite la colère des universités», *Le Monde*, le 27 novembre 2020.

2020年度のフランスの学生たちの声の事例～ある動画から～

学生の声が社会に拾われ国に届く仕組みの段階的整備は、学生をサポートするためのボランティア組織等の自律的な活動がフランス各地で展開していたこととも連動しているよう。動画サイト「ドキュマンテール・ソシエテ」に2021年3月17日に投稿された動画『コロナ禍：私の学生生活』には、フランスの学生たちのコロナ禍のケーススタディと、それを支える支援団体や支援意識の実例が取り上げられている。前段で見た新聞記事上で少しずつ可視化されていった若者たちの集団的な「声」が、より至近距離から広く発信されている。この動画で取り上げられているのは、1) サポート組織 LINKEE、2) ボルドーのグランゼコールに通う学生の一事例 3) グルノーブルでのシェアハウスでの大学生間の互助の取り組みの事例である。

LINKEE (<https://linkee.co/>) は、フードロスの問題視し2016年に発足した組織で、生活不安定者の支援を主目的としていたが、2020年10月から新たに、学生向けに食糧配達を開始した。毎月15万～20万食を準備し、学生証のチェックを受けた学生たちに無料配布する仕組みも整備された。スーパーマーケットさながらに陳列された食糧を、会場にやってきた学生たちがかごに入れていく。また、コロナ禍以前から行っていたホットミールの配布・配達サービスを学生向けにも開始したり、布製の生理用ナプキンの配布も行うなどしている²²。また、スタッフの多くはボランティアであるという。インタビューに答えたあるスタッフは、インターネット関連会社の管理職で、月曜と木曜にボランティアで働いているという。無料で食料を得ることを恥ずかしいと思っている学生が少なくないことを知り、困窮している人々をサポートするには、困窮していない人々のほうからアクションを起こし寄り添うことが大切だと考えている。

動画は続いて、ボルドーのグランゼコールに通うある学生の事例を紹介している。CROUSの学生寮に宿泊するとある学生は、家賃を抑えるためもあり、恋人でもある教員志望の友人と家賃を折半していたが、友人が生活費節約のため実家との往復が困難になったことなどから、コロナ禍以後独り暮らしを余儀なくされた。実家からの経済支援はもともとなく、生活のやりくりは自分で考えねばならず、孤立感を抱いている。授業はオンラインがほとんどであるが、水漏れが直らない寮の修理のために授業に専念するのが難しいなどの、住居管理上の困難も、一人で解決せねばならない。エリートが集うグランゼコールの学生たちもまた、コロナ禍で経済的・精神的不安に陥っていたことがこの事例からわかる。

動画はさらに、グルノーブルのとあるシェアハウスの事例を紹介している。低家賃住宅を、入居可能者数50人程度の学生寮として用いている。入居者は20歳～30歳以下で、家賃は一人当たり300ユーロほど。生活費は、同じ部屋をシェアする者どうしで、計算アプリで折半する仕組みである。収入が限られた人の分を、余裕のある人が補う仕組みが、グラフで可視化される。日本で同様の仕組みを導入した場合、赤字を出していることがこのように可視化されても大丈夫なだけの互助の精神があるだ

²² 生理用ナプキンや避妊具などは、例えばリヨン第二大学図書館のトイレで、キャビネットに収められて自由にお取りくださいますの貼りが付される形で無料配布されている。フランスの各地の大学で同様の取り組みはすでに行われている可能性がある。

ろうか²³。また、ここに宿泊する学生たちの多くは、近隣のマルシェに足を運び、そこで「訳あり」で商品としては売られなかった生鮮食料品を商店主から無料でわけてもらう。「学生たちのコロナ禍での困窮はわかっている。できるだけサポートしたい」と店舗の人々は語る。そして、学生のためにあえて商品を何かを残そうといった無理はしないのだという。昨日残っていた商品が今日残っているとは限らないのだが、あくまでも、できるサポートを行うという姿勢を崩さない安定感が、そこには感じられた。

新聞記事のヘッドラインの整理ならびに、2020年のコロナ禍の学生生活取材したある動画の視聴体験を踏まえて、2021年秋、aide/alimentaire/covid/étudiant（援助、食料、コロナ、学生）というフランス語のキーワード4つと、「食料 コロナ 学生」という日本語のキーワード3つで、それぞれGOOGLE検索をかけてみた。フランス語の検索ワードでは、学生たちに食料をはじめとする生活必需品を提供するサポート組織や制度のポータルサイトが数件ヒットした。日本語では、文部科学省が取りまとめた、国内いくつかの大学で行われた単発での支援措置の事例数件が掲載された2ページものの資料がヒットした。それに、大学が単体で行っている援助の仕組みの個別ページがちらほら続く。検索エンジンと検索ワードとの連関の仕組みには筆者は暗い。そして先述のとおり、日本とフランスとは、大学生であることが、制度的に言ってもコスト面で言っても大きく異なる。少なくともこの二点を大きく差し引いて考えるべきとはいえ、この検索結果から、学生生活が成立する上での基盤に他ならない食料という究極の生活必需品の支援を行う仕組みについて、その情報の公開のされ方、いきつきたい情報にたどりつくために必要となるクリック回数の、日仏間でのあまりの違いに瞠目した。食べるということを、比喩としてでなく重視する発想が、日本では、フランスに比して、不足していた。「生活」と「命」がひとつの「VIE」という単語の含意に納まっている文化圏での学生生活は少なくとも、コロナ禍におけるその困窮の度合いやサポートの仕組みや試みが、より言語化・言説化されていた。

以上の報告を踏まえての懸案事項もいくつか付記する。まず、留学生の困窮についての情報共有が、コロナ禍の始まりの頃を別として、数か月を経る中で、減少傾向にあったとの印象を持った。このことに関連してもう一つ懸念されたのが、学生をサポートする連帯意識の言説（美談）に取りこぼされる個別の多様な声を拾う仕組みは如何に維持されたか、あるいは如何に減っていったかという点である。仕組みが整うことは常に、その仕組みから外れる弱者が生まれる契機でもあるからである。

むすびにかえて

2020年12月のある夜の8時頃、寮の部屋の鉄扉を小さくコツコツと叩く音がした。二度叩かれたので思い切って扉を開けたところ、学生棟のほうの住人で、リヨン市内の高等教育機関の学生を名乗る女性が立っていた。コロナ禍で孤立している入寮者への配慮として、大学から、すなわち国からの

²³ この取材を受けた学生たちの部屋の壁には、レインボーフラッグがかかっていた。この同居人グループが、性別やジェンダーの垣根を越えた集まりであったことは、偶然なのかもしれないが、付記に値する。

有給で声を聴く（聞き取り調査などではなく）役目を担っているとのことだった。私は大丈夫ですと謝意を表明した上で、エレベーターホールや1階エントランスなどに、会合禁止の張り紙があることなどから寮の隣人に声をかけることも避けてきた状況にあって、こうして訪問いただけるだけで、気持ちやすこし楽になりましたと伝えた。「よくわかります。こうした状況下ですので。何かありましたら、私たちがいるのだ、ということ覚えておいてください」と彼女は言ってくれた。ことばの正確さと態度の冷静さが相まって、聴くだけで安心するような声だった。日ごろから、感染症予防対策に細心の注意を払って暮らしていたが、実際に何かあった場合の命綱としてこの寮にはこの人がいるのだということ、そして彼女が個人で動いているのではなく、大学＝国がサポートしているということ、サポートされる当事者として知れたことは大きなことだった。実際に何か起こった場合に助けられる仕組みがどの程度機能しているのかを実体験する機会は、幸か不幸か、なかったが、ことが起こる以前に、自分がそもそも制度に守られているとの情報をこうして与えてもらったこと、さらには必要に応じて与え続けてもらえる仕組みがあることは、大変重要であったと思う。